

[平成30年度教員研究費特別研究]

「社会とアート」を喚起する

－「内灘闘争－風と砂の記憶－」展をめぐる－

Arousing “Society and Art” : An Exhibition of “the Uchinada Struggle”

稲垣 健志
INAGAKI Kenji

はじめに

「内灘闘争－風と砂の記憶－」展は、平成30年（2018年）度金沢美術工芸大学特別研究『「社会とアート」に関する学際的研究－『内灘闘争』の記憶をめぐるアート表現－』の成果の一部である。2017年、稲垣健志（一般教育等）と星野太（芸術学）に大学院生・修士生5名を加えてArt Today Collective (ATC)を結成した（この名称は、1970～80年代のイギリスにおいて「人種」をめぐるラディカルな政治・文化活動を展開していたRace Today Collectiveをもじったものである）。ATCの目的は、ゆるやかに繋がりながら、それぞれが自分の専門を活かして「社会とアート」にかかる問題を広く世に問うことにある。また、教員と大学院生による学際的研究という形式は、「分野を横断して自由で多様な創造性を実現する大学院教育の改革」という本学の第2期中期目標を視野に入れたものである。

近年、アーティストが社会と深くかかわっていくことの必要性を説いた「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の提唱や、全国各地で開催されている「芸術祭」の流行などを受けて、「社会とアート」に関する議論が盛んにおこなわれている。一方で、鷺田清一が、『「アートと社会」』という問題の立て方は、いま起こっている『「アート」』の液状化という現象をむしろ隠蔽するようにはたらきかねないⁱと指摘しているように、「社会とアート」という問題設定そのものの妥当性についても議論がされている。

ここで「議論されている」と繰り返しているのは、「社会とアート」をあつかう研究者が、この件について議論のみに終始しているからである。「社会とアート」をテーマに掲げたトークイベントやシンポジウムなどにアーティストを招き、「異種格闘技」と称するイベントも見受けられるが、自分たちは「議論」という土俵から降りることはないし、「実践」というリングに上がることもない。実践する者が議論に参加することはあっても、議論する者が実践するケースはほとんど見られないのだ。もちろん、議論など意味がないからやめよというわけではない。しかし、実践が伴わなければ、その議論は空転し、やがて閉塞していくだろう。今回我々が「内灘闘争」を題材にした展覧会を企画したのは、「まずは『社会とアート』を実践してみよう。話はそれからだ。」という趣旨からである。そうすることで、議論と実践が乖離しがちな「社会とアート」の喚起を試みたのである。

1. 「内灘闘争」の概略

ここではまず、展覧会の前提となる「内灘闘争」の概略をみていきたいⁱⁱ。1952年9月20日、石川県河北郡内灘村（当時）の砂丘地を日本に駐留するアメリカ軍の砲弾試射場に使用したいと日本政府から石川県に伝えられた。もとより朝鮮戦争真っただ中のアメリカは、日本の企業から大量の砲弾を発注していたが、実戦の前にそれらを試射する場所を探し

ていた。当時、試射場の候補地には、愛知県の伊良湖岬、静岡県御前崎、青森県の八戸、石川県の内灘砂丘があげられていたが、日本政府が内灘砂丘に白羽の矢を立てたのは、第二次大戦以前に旧日本陸軍の実弾射撃演習場として使用した国有地があること、そこが砂丘地であり住民への補償額が少なくてすむと考えたことが理由とされている。試射場の接收が伝えられた翌日、内灘村議会はすぐに接收反対を決議した。さらに、中山又次郎村長（当時）や社会党、労農党、共産党などによる陳情、住民による反対署名活動などにより、10月8日、接收はいったん白紙となった。

しかし、10月30日、第4次内閣を組閣した吉田茂は、石川県選出の参議院議員である林屋亀次郎を国務大臣に任命し、試射場用地の接收交渉にあたらせ、11月25日には接收を閣議決定した。これに対し内灘村は、砂丘地の使用は4か月の期限付きであること、期限後の米軍駐留は認めないこと、村への補償金は即時現金払いすることなどを接收に応じる条件として提示した。政府は12月の閣議でこうした条件を受け入れることを決定し、1953年1月から4月まで、内灘の砂丘地は試射場として使用されることになった。

3月18日、実際に試射が開始されると、大きな発射音や炸裂音は地元住民苦しみ、さらに永久接收が噂されるようになると、石川県全体にも試射場反対の空気が広がっていった。そんな中でおこなわれた1953年4月24日の参議院議員選挙において、現職官僚で接收交渉役だった林屋亀次郎が落選した。そして、「内灘永久接收反対実行委員会」の発足、内灘村民大会での永久接收反対の決議、県議会での無期限使用阻止の声明発表と続いた。しかし、こうした流れに逆行するように、第5次吉田内閣は、6月2日、米軍による試射場の継続使用と砂丘地の永久接收を閣議決定したのである。

地元住民らは反対実行委員会を強化し、試射場内に小屋をつくり座り込みをしたり、上京して国会議事堂前で「金は1年、土地は万年」と書かれたムシロ旗を掲げてデモをおこなったりするなど、その抗

議活動は激しさを増していき、いわゆる「内灘闘争」として全国的に知られていくようになる。全国の労働組合や学生、革新政党などが「闘争」を支援し、清水幾太郎や丸山真男といった当時を代表する知識人たちもこれに参加していった。こうして「内灘闘争」は、戦後日本における最初の大規模な米軍基地反対運動となったのである。

しかし、運動の全国的な盛り上がりとは対照的に、闘争の長期化による閉そく感と生活の困窮により、村には条件付きの接收許可もやむなしという雰囲気も漂い始めた。もとより、内灘村議会内では、反対闘争はある種の条件闘争と位置付けられていた。そして、米軍による試射場の使用は3年以内とすること、試射場が不要となった場合はその国有地すべてを村に払い下げることを条件に、9月14日、内灘村は政府との妥協に応じた。そして、10月4日には反対実行委員会が座り込み小屋を撤去し、「内灘闘争」は幕を閉じた。

2. 「内灘闘争」の記憶をたどる

上述のように、「内灘闘争」には清水や丸山をはじめとする多くの知識人も参加しており、このこと自体、戦後の社会運動の在り方を考えるうえで非常に興味深い。しかし、それ以上に我々の目を引いたのは、現在の内灘町には「内灘闘争」に関する資料館「風と砂の館」があり、地元の小学生などが授業の一環として見学に来ること、さらには米軍施設の一部であった射撃指揮所、着弾地観測所がそのまま残されていることであった。戦後の東アジアの歴史・情勢などを踏まえながら、このように生々しく残存する「内灘闘争」の記憶に触発されたアート制作を展開することで、「社会とアート」に関する重要な研究成果を提示できるのではないかと考えたのである。

我々はまず、米軍施設や「風と砂の館」を訪れ、「内灘闘争」の記憶をたどるところから活動を開始し、それぞれが作品の構想を練っていった。



(内灘町歴史民俗資料館「風と砂の館」)



(着弾地観測所跡)



(射撃指揮所跡)

そして、6月23、24日、カルチュラルタイフーン2018(龍谷大学)に参加し、「『裏日本』からアジアを眺めるⅡ-内灘闘争の記憶をめぐって」というパネル展示をおこなった。カルチュラルタイフーンを主催するカルチュラルスタディーズ学会のHPによれ

ば、このイベントの趣旨は以下の通りである。

既存の学会やシンポジウムの形式や制度にとらわれず、さまざまな立場の人々がお互いにフラットな関係のもと発表や表現活動をおこなうため、2003年より毎年、開催されてきました。その目的は、大学内外の研究者、社会活動や社会運動に関わる実践者、さまざまな領域で活躍しているアーティストたちが、専門分野の垣根を越え、文化と政治にかかわる課題にたいして自由な意見交換と創造的な表現活動を行う場を作り上げることにあります。ⁱⁱⁱ

このようなイベントにおいて我々は、各メンバーが持ち寄った展覧会作品のアイデアや習作を展示し、様々な分野の研究者やアーティストと議論しながら、構想を深めていった。



(カルチュラルタイフーン2018)

さらに「内灘闘争」を知る方の「記憶」を探るため、北陸鉄道の労働組合員として闘争に関わった杉村雄二郎さんと、内灘村青年団代表として国会まで陳情に行かれた杉村竹子さん（ご夫妻）、そして津幡町出身で闘争当時の米軍施設で働いていた川幡登さんの二組にお話を伺った。「内灘闘争」に全く対照的なかたちで接していた二組の「記憶」を伺えたことは、ATCの活動において大変得難い経験だったと言えるだろう。

3. 「内灘闘争—風と砂の記憶—」展

このような調査、パネル展示などを経て、メンバーはそれぞれの作品を完成させた。その一覧は以下のとおりである（所属は当時）。

内田 望美（美術工芸研究科博士後期課程）
 タイトル：それゆけ♡恋バナ号～内灘編～
 素材：内灘の恋バナ

榮長 義雄（美術工芸研究科修士課程）
 タイトル：色彩・形態観測
 素材：キャンバスに油彩

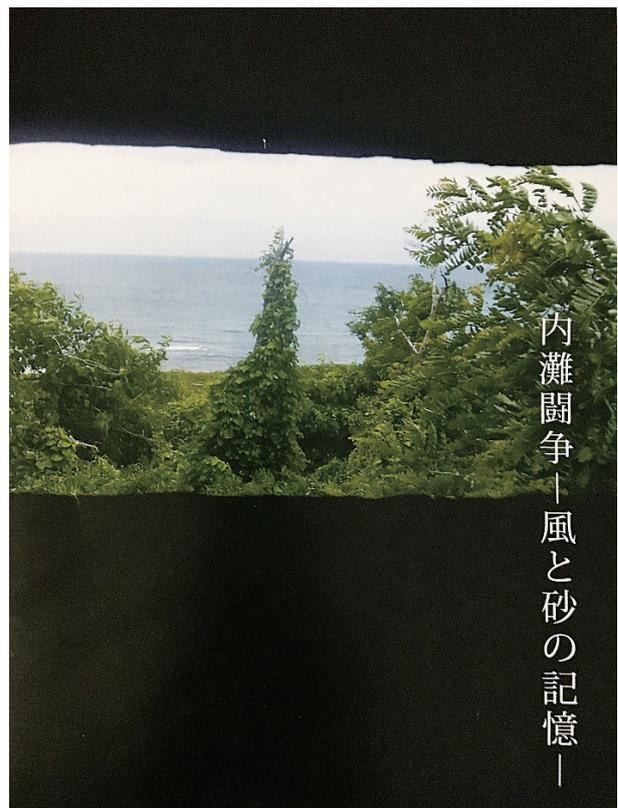
山岸 耕輔（美術工芸研究科修士課程）
 タイトル：観測者
 素材：ミクストメディア

高橋 直宏（美術工芸研究科博士後期課程）
 タイトル：先触れ
 素材：木に着彩

石田 香（美術工芸研究科修了生）
 タイトル：対話
 素材：鉄線、木製椅子

星野 太（芸術学教員）
 タイトル：内灘のこと
 素材：ミクストメディア

そして、2018年秋「内灘闘争—風と砂の記憶—」展を二期に分けて開催した。第一期は10月24日から29日で、会場は射撃指揮所跡（高橋作品）、着弾地観測所跡（石田作品、星野作品）、「風と砂の館」（内田作品、榮長作品、山岸作品）をお借りした。また、会期期間中の28日には作品のガイドツアーを企画し、内灘町の方にも多く来ていただいた。さらに第二期展覧会（11月10日から16日）をアートベース石引で開き、11月9日には神戸大学から社会学者の小笠原博毅氏を招いてオープニングトークをおこなった。なお、別途作成した冊子に説明があるため、各作品については詳しく触れない。ここでは小笠原氏から指摘があったこの展覧会から見えてくる「社会とアート」の論点を中心にまとめておきたい。



（「内灘闘争—風と砂の記憶—」展パンフレット）

一つ目のポイントは、「内灘闘争とは何だったのか？」という問いである。「闘争」である以上、（誰が）勝って（誰が）負けたのかという評価を下すのが常套なのかもしれない。しかし、「内灘闘争」はそ

うした「勝ち負け」を軽々に下せるものではない。それどころか「勝ち負け」という評価自体この出来事の本質を見誤りかねない。むしろ、今回の展示のように、「内灘闘争」を様々な芸術技法を使って表現するというやり方が、「内灘闘争とは何だったのか？」という問いに対して、説得的な解を提示できる可能性があるのかもしれない。

今回の我々の作品には、フィクションとノンフィクションの境界をあいまいにするものがいくつかあった。2つ目のポイントはまさにその点である。実証主義的な歴史学や実証的なデータに基づく社会学ではなく、フィクションかノンフィクションかわからない思い出話や書きなぐったメモ、そういったものにこそ社会の現実が反映される。つまり、何が真実なのかではなく、何が真実として語られているのかが重要なのであって、それを探るのにフィクションかノンフィクションかといった境界線は特に意味を持たない。今回の展示はそのことを改めて実感させるものであった。

最後のポイントは、「内灘闘争」を語る言葉とアートとの関係についてである。これは、1つ目のポイントとも関連するが、例えば、「内灘闘争」を扱った歴史書、論文、あるいは小説などは、「闘争」を時系列でたどり、出来事の因果関係も整理して「わかりやすく」記述する。しかし、実際にはさまざまな矛盾や対立が同時並行的に起こり、人によってそうした出来事への評価や印象、記憶も異なるはずである。「内灘闘争」をアートで表現することの可能性はまさにそこに見出せる。つまり、複雑で矛盾した出来事が同時並行的に起こった「闘争」を「きれいにまとめる」ことなく表現することで、鑑賞者がどこに目線を置き、どういう先入観、どのような知識をもって作品を見るかによって、「闘争」の姿が変わってくる。それにより、「闘争」そのものが決して「わかりやすい」「一方向的」なものではなく、複合的で重層的な社会的出来事であることが表現できるのではないだろうか。

最後に今後の課題、もしくは次のテーマに触れておきたい。現在、確かに内灘町には「闘争」の記憶

が多く残されている。しかし、いろいろ調べていくと、闘争直後から一貫して記憶されてきたわけではない。「闘争」のイメージを払しょくするような街づくりが積極的になされた時期もあるのだ。つまり、「内灘闘争」の記憶と忘却の相克といったものがあつたはずである。それならば、いつ、なぜ「闘争」は忘れられる必要があり、いつ、なぜ、どの部分がどのように記憶していいことになったのか、こうした点を調査し、それをアートで表現することが次のステップとなりえるだろう。



(「風と砂の館」での作品説明の様子)



(指揮所跡での作品説明の様子)



(アートベース石引での展示)

おわりに

「内灘闘争-風と砂の記憶-」展に加えて、11月18日には「内灘砂丘フェスティバル2018」にパネリストとして参加してATCの活動報告をおこない（稲垣、内田、山岸）、12月15日には、神戸において、「内灘闘争」を背景にした映画『非行少女』（1963年）に関するトークイベントに登壇した（稲垣、星野）。さらに2019年6月1日のカルチュラルタイフーン2019（慶応義塾大学）において、稲垣、星野に加えて、映画学が専門の神戸大学の板倉史明さんと、ドキュメンタリー『ムシロ旗と星条旗～あなたのまちに基地があったら～』を制作したMRO北陸放送の中山誓也さんに登壇してもらい、我々の展示を踏まえつつ、「内灘闘争」を題材にした映像やアート作品に着目し、その描かれ方、記憶のされ方について、

フロアを巻き込みながら検討した。このように、我々は「社会とアート」を実践してきたが、このテーマについて同一の見解を持っているわけでもなければ、明確なゴールを見通せているわけでもない。我々は実践と議論を同時に進めながら、それぞれが自分なりにこのテーマと向き合い、葛藤し、次の一歩をどう踏み出そうか思いめぐらせているのである。

本論文は平成30年度特別研究の成果の一部である。また、「内灘闘争-風と砂の記憶-」展を開催するにあたり、数多くの方に大変お世話になった。とりわけ、インタビューに快く応じていただいた杉村雄二郎さん、杉村竹子さん、川幡登さん、「内灘闘争」の資料の貸与をはじめ様々な面でご尽力いただいた内灘町生涯学習課の南陽介さん、そして展覧会のトークイベントにゲストとしてお越しいただいた神戸大学の小笠原博毅さんには、記して御礼を申し上げる。

註

- i 鷺田清一『素手のふるまい アートがさぐる〈未知の社会性〉』（朝日新聞出版、2016年）、121頁。
- ii 「内灘闘争」の概略については、主に、内灘町が作成した『ビジュアル内灘町史 砂丘に生きる町』（北國新聞社出版局、2003年）と『砂丘のまちの絆～内灘びとの軌跡～』（北國新聞社、2012年）を参考にした。
- iii <http://cultural-typhoon.com/act/jp/about/>
（最終閲覧日：2019年10月30日）

（いながき・けんじ 一般教育等/社会学・歴史学）
（2019年11月7日 受理）